

別紙 4

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 小学生の対人関係イラショナル・ビリーフに関する研究
—不登校の予防を目指して—

氏 名 篠原尚人

論 文 内 容 の 要 旨

本研究では、小学校の不登校の背景要因の一つであるとされる対人関係をイラショナル・ビリーフという認知面から捉え、小学校の不登校予防教育の開発のために3つのことを目的とした。1つ目は、小学生の対人関係イラショナル・ビリーフを測定する尺度を作成することである。2つ目は、小学生の対人関係イラショナル・ビリーフと自尊感情、ストレス反応、不登校傾向との関連を検討することである。3つ目は、小学生の対人関係イラショナル・ビリーフに焦点を当てたストレスマネジメント教育を5年生の学級集団を対象に実施し、プログラムの有効性を検討することである。

第1章では、不登校の児童数が年々増加傾向にあり、小学校において課題となっていることを掲げた。そして、不登校対応を予防という視点から捉え、これまでの不登校予防教育や小学生の対人関係の特徴、海外や日本のイラショナル・ビリーフ研究を概観した。海外のイラショナル・ビリーフ研究では、中学生を対象とした研究で不登校とイラショナル・ビリーフとの関連を明らかにしている。しかし、我が国では小学生を対象としたイラショナル・ビリーフの研究は少なく、対人関係や不登校とイラショナル・ビリーフについての研究が十分に進められていないことを明らかにした。以上のことから、不登校と関連のある対人関係イラショナル・ビリーフの特徴を明らかにすることは重要であり、学校教育における不登校の予防には、対人関係におけるイラショナル・ビリーフに焦点を当てたアプローチの方法を明らかにすることは必要なことであると考えられる。

第2章では、小学生の対人関係イラショナル・ビリーフを包括的に捉えることができる尺度「対人関係イラショナル・ビリーフ尺度（小学生版）」を開発した。研究1においては、小学校4年生、5年生、6年生を対象に親、教師、友達と接するときに気をつけていることの調査を実施したところ、内容的妥当性の高い対人関係イラショナル・ビリーフ尺度作成のための項目を収集することができた。研究2では、研究1で収集した項目を基に親、教師、友達に対する対人関係イラショナル・ビリーフ尺度を開発し、その信頼性と妥当性を検討した。まず、親に対する対人関係イラショナル・ビリーフ尺度20項目に対して因子分析を行った結果、親からの躰に関する項目からなる「親への服従」、親への気づかいに関する項目からなる「親への気づかい」、親からの承認に関する項目からなる「親からの承認欲求」という3因子構造であることが明らかにされ、それに基づいて3つの下位尺度を作成した。次に、教師に対する対人関係イラショナル・ビリーフ尺度20項目に対して因子分析を行った結果、教師からの承認に関する項目からなる「教師からの承認欲求」、教師への礼儀に関する項目からなる「教師への礼儀」、教師への気づかいに関する項目からなる「教師への気づかい」という3因子構造であることが明らかにされ、それに基づいて3つの下位尺度を作成した。それから、友達に対する対人関係イラショナル・ビリーフ尺度20項目に対して因子分析を行った結果、友達への援助に関する項目からなる「友達への援助」、友達と仲良くすることに関する項目からなる「友達への配慮」、友達への気づかいに関する項目からなる「友達への気づかい」という3因子構造であることが明らかにされ、それに基づいて3つの下位尺度を作成した。これらの尺度の信頼性と妥当性を検討した結果、高い信頼性が確認された。妥当性については、内容的妥当性や基準関連妥当性の一つである併存的妥当性が認められた。この結果から、親、教師、友達に対する対人関係イラショナル・ビリーフ尺度を使用して、小学生のイラショナル・ビリーフを捉えることが可能となった。

第3章の研究3では、対人関係イラショナル・ビリーフと小学生の自尊感情、ストレス反応、不登校傾向との関連について検討した。その結果、親に対する対人関係イラショナル・ビリーフでは、「親への気づかい」と自尊感情の「否定的自尊感情」との間に負の関連を示した。また、ストレス反応の「無気力」との間に正の関連を示した。一方、「親からの承認欲求」は、ストレス反応の「不機嫌・怒り感情」、「無気力」との間に負の関連を示した。教師に対する対人関係イラショナル・ビリーフでは、「教師からの承認欲求」とストレス反応の「身体的反応」との間に負の関連を示した。「教師への気づかい」は、不登校傾向との間に負の関連を示した。友達に対

する対人関係イラショナル・ビリーフでは、「友達への配慮」と自尊感情の「肯定的自尊感情」との間に正の関連を示した。また、不登校傾向との間に負の関連を示した。「友達への気づかい」は、自尊感情の「肯定的自尊感情」との間に負の関連を示した。また、自尊感情の「否定的自尊感情」やストレス反応の「身体的反応」、不登校傾向との間に正の関連を示した。各研究で得られた結果から、「親からの承認欲求」、「教師からの承認欲求」、「教師への気づかい」、「友達への配慮」のビリーフは健康的であり、ラショナル・ビリーフの可能性があると明らかになった。また、「親への気づかい」、「友達への気づかい」のビリーフは不健康なビリーフであり、イラショナル・ビリーフであることが明らかになった。「友達への気づかい」のビリーフは、友達関係において自尊感情、ストレス反応、不登校傾向との間に正の関連があり、ストレスマネジメント教育を実施して健康的なビリーフに修正する意義が示された。

第4章の研究4では、対人関係イラショナル・ビリーフに焦点を当てたストレスマネジメント教育のプログラムを作成し、実践した。ストレスマネジメント教育のプログラム作成では、まず論理療法のABC理論やトランスアクショナルモデルの出来事への受け止め方を修正すれば、気持ちが楽になるという理論をプログラムの中心とした。次にストレスマネジメント教育としてプログラムを作成するには、学校教育のどの場面で実施するのが良いのか検討し、小学校5年生の保健学習「心の健康」で実施することとした。「心の健康」の学習では、心と体の相互の影響や不安や悩みへの対処の仕方を学習する。そこで、ストレスマネジメント教育のプログラム作成においては、「①ストレスへの気づき、②ストレス反応への気づき、③ストレス反応を抑える技法の習得」というストレスマネジメント教育の三要素を参考にして、「心と体の相互の影響」や「不安や悩みへの対処法」を含めたプログラムを作成した。ストレスマネジメント教育の実践では、「友達への気づかい」のビリーフをターゲットにして、ビリーフを修正し、気持ちが楽になる感情体験を行った。これにより、対人関係イラショナル・ビリーフ、否定的自尊感情、不登校傾向を低減する可能性が示唆された。この結果から、研究4で実施したストレスマネジメント教育のプログラムは、ストレスマネジメント教育の一つとして実施することの有効性が明らかになった。

第5章では、不登校予防教育を認知的枠組みで捉えることの意義や学校現場における不登校予防のあり方について総括的に討論を行った。本研究で明らかになった小学生の対人関係イラショナル・ビリーフである「友達への気づかい」は、非自己

主張的であり、友達関係の満足度を低下させ、関係葛藤が生まれやすい考え方である。そのため、自己受容ができなくなったり、自尊感情を低下させたり、不登校傾向を高めたりする可能性が示唆された。また、本研究で実施したストレスマネジメント教育は、対人関係イラショナル・ビリーフ、否定的自尊感情、不登校傾向を低減させることから、不登校を予防する一つの方法として有効であると思われる。今後の課題としては、対人関係イラショナル・ビリーフ尺度の妥当性の検討である。本研究では内容的妥当性と基準関連妥当性の一つである併存的妥当性について検討するにとどまった。構成概念妥当性について検討する必要がある。また、イラショナル・ビリーフの中核とされる「当然である」、「ねばならない」、「すべき」といった言葉が付加されているのにもかかわらず、イラショナル・ビリーフの特徴を示さなかったビリーフがあった。この点については、疑問であり、今後の大きな課題である。そして、本研究で実施されたストレスマネジメント教育のプログラムには、効果の持続についての課題が残った。今後は、不登校傾向の低減を持続させるための方策を検討することが必要である。